

はじめに

宇宙と生命の進化は、数十億年という、まさに天文学的な時間をかけて、数百万年前の地球上に、道具を製作・使用する直立二足歩行の人類を、類人猿から分岐する形で生み出しましたが、2万年ほど前に現生人類が誕生するまでも、なお長大な時間を要しました。数千年前に世界各地に古代文明が散発的に興るようになると、いわゆる物質文明は幾何級数的な発展を遂げ、特に18世紀半ばに起こった産業革命以降には、天然資源を存分に活用した、華やかな現代文明が開花しました。

ところが、それからたかだか二百年余しか経ていないにもかかわらず、今では、地球と生命体が長年月をかけて生成したその貴重な天然資源を、その中でも、エネルギー源としてはもとより、さまざまな製品の原材料としてとりわけ重要な石油を、事実上、遠からず使えなくなるところまで費消してしまっています。そして、“温室効果ガス”の過剰排出によるとされる地球温暖化問題が俎上に載せられたこともあって、現代の人類にも手に余る原子力エネルギーへの傾斜を世界的に強めていた矢先に起こったのが、世界経済の大混乱であり、イスラム圏をはじめとする諸国の政治的大変動であり、わが国では千年ぶりの規模とされる東日本大震災であり、それに続発した世界最悪レベルとされる原発事故でした。

この人類史に残るほどの天災および人災が、世界史的に見てどのような意味を持っているのかは、現段階ではまだはっきりしませんが、少なくとも原子力エネルギーへの依存、天然資源の濫用、贅沢三昧の生活といった現代文明の根幹に甚大な影響を及ぼすことだけはまちがいないでしょう。いずれ直面しなければならないことを、多くの人々がうすうす承知していながら考えずにすませてきた大問題が、もう逃れようもなく、まさに目前に迫っているということです。この時代は、世界中の人々、特に先進諸国に住む人々が、これまで続けてきた消費文化という近視眼的な生活様式を、根本から改めざるをえなくなるという点でも、人類史的に見て、最大級の転換点に当たるのではないかと思います。

これまで人類は、計り知れないほど大きな天変地異や疫病の大流行などの試練を、何度となく受けながら、そのたびに乗り越えてきました。その中には、長期にわたって続いた厳寒の氷河期も含まれるわけですが、その時代には、満足の防寒具も暖房具もありませんでした。もちろん、試練は自然の脅威に限り

加害者と被害者の“トラウマ”

ません。有史以後の歴史をひもとけば、侵略戦争や大量殺戮が、文明の発達と表裏一体のようにして多発していることがわかります。

比較的最近になってからも、ナチス・ドイツによるユダヤ人の殲滅的殺戮や、アメリカ軍による日本各地の市街地への無差別戦略爆撃に続く、広島・長崎への原爆投下が、さらには、長期にわたるベトナム戦争がありました。その後も大小の規模の侵略や内戦が、ごく当然のように、世界各地で頻発しています。人類の歴史は随所で、深刻なストレス状況に彩られているのです。にもかかわらず人類は、それを跳躍台にするかのようにして、それまで以上に飛躍するということを繰り返し、全体として眺めれば、弛みなく前進を続けてきたわけです。

19世紀に生きたチャールズ・ダーウィンは、自著『人類の系統 *The Descent of Man*』の中で、「自己尊重の美德は、自らの部族の繁栄に、自明とは言えないまでも実際に悪影響を及ぼしかねないので、未開人がそれを重視することは一度たりともなかった」(Darwin, 1871, p. 96)と述べています。このように人類は、ひとつには種々の危機を乗り越えるために、自らが帰属する集団の維持・安寧・繁栄を優先して個を殺し、権威や集団の意志に忠実に従ってきた長い歴史を持っています。

それに対して、現代では、特に先進諸国で顕著ですが、さまざまな権威が急速に崩壊するのと並行して、個を尊重する人権意識が、全世界的に高まってきています。こうした変化は、人間が、カリスマ的権威を必要としない段階によいよ入りつつあることを示すものなのでしょう。この、人類史的に見ても、かつてないほどの大きな進歩は、天然資源の枯渇のようなものとは違って、後戻りすることはないはずです。



もしストレスが、これまで考えられてきたように、本当に害を及ぼすものでしかないとすれば、甚大なストレス状況に繰り返し直面してきた人類が、それによって壊滅的な打撃を受けて後退するどころか、逆に、終始一貫して進歩を続けてきたのは、なぜなのでしょう。そこには、何か大きな力が働いているにちがひありません。現在、世界中で確固不動の定説になっている心因性疾患のストレス理論が想定するように、人間が脆く弱い存在だとすればなおのこと、ここには大きな矛盾があるように思えます。

本書は、そのストレス理論を基盤としたPTSD(外傷後ストレス障害)理論を、豊富な資料を用いて厳密に検証しようとする試みです。PTSDと呼ばれる一群の症状は、その理論が主張する通り、本当に過去のストレスや“トラウマ”——過去

に受けた“心の傷”——によって起こるのでしょうか。昨今の心理療法やカウンセリングは、この理論と手を携え、人間が脆弱であることを当然の前提にしているため、“受容”と呼ばれる慰撫的な対応が称揚され、“癒し”という甘美な目標が設定されています。そして、その裏では、抗うつ剤や安定剤の永続的処方必須とされているのです。もちろん、それによって真の意味での治療が可能なら問題はないのですが、そのような対応や処置に満足できない人たちがたくさんいることも、まちがいないところです。

本書では、これまでにないさまざまな角度から、この問題を徹底的に究明しようとしています。その結果、私なりに得心のゆく、いちおうの結論を導き出すことができたように思います。とはいえ、実際に、この問題の核心にどこまで迫れたかについては、読者の方々の判断に俟つほかありません。本書について、忌憚のないご意見をたまわれれば幸いです。



本書は全7章で構成され、巻末に2編の付録がついています。以下、各章の内容を簡単に説明しておきます。第1章では、人間はPTSD理論が想定しているような脆弱な存在ではないことを、具体例をあげて説明したうえで、いくつかの側面から、PTSD理論が内包する欠陥を浮き彫りにします。第2章では、PTSDとされる症状やその原因論は、時代とともに移り行くものであることを指摘した後、この理論に潜む7項目の問題点を拾いあげ、ひとつずつ厳密に検討してゆきます。

第3章では、広島の被爆者の心理学的研究で知られるロバート・リフトンらの尽力により、この概念がひとつの疾患単位として、アメリカ精神医学協会（APA）が策定する診断マニュアル（DSM）第3版に導入されるまでの経緯を概観し、それが政治的背景の中で成立したものであることを確認します。そして、PTSDが、ある時は被害者側へののみ、ある時は、ベトナム帰還兵のような加害者側へののみ見られるとされる点で一貫性を欠いていることなどから、理論的にも破綻していることを示します。

第4章では、社会心理学者スタンレー・ミルグラムの卓抜な実験で得られた結果を詳細に検証し、人間は権威に忠誠を尽くそうとする意志を、どれほど強く内在させているかを見てゆきます。そして、そのような起源の古い意志と、それに歯向かって正当な主張をしようとする、起源の新しい意志とがいわば衝突するところに心身の反応が起こること、さらにはそこに、自らの責任の自覚が隠されていることを明らかにします。次の第5章では、被害者のものと当然

加害者と被害者の“トラウマ”

視されているPTSDが、集団によるものにしても個人によるものにしても、純粹な加害行為によっても起こるのかどうかを、いくつかの側面から検討します。

第6章では、少々視野を広げ、精神科医の小坂英世により精神分裂病の心理療法として開発された小坂療法が、それまでのトラウマ理論を脱却するまでの経過を忠実に辿ることを通じて、PTSD理論が何を避けようとしているのかを探ります。最後の第7章では、激的なストレスに対して、人間はどのような対応をするものなのかを、原爆の被災者と、ナチの強制収容所の生還者を取りあげて検証します。そして、強いストレス状況にこそ、人格を向上させる道が開かれていることを明らかにします。



本書は、著者の運営する「心の研究室」ホームページでの連載に肉づけする形で、2009年5月にいちおうの完成をみたものです。その後も、最新の資料をとり込みながら改稿を続けてきましたが、前著（『本心と抵抗』2010年、すびか書房）と同じく、この出版不況のため、なかなか出版社が見つかりませんでした。このたび、国書刊行会の佐藤今朝夫社長のご好意を得て、ようやく日の目を見ることができました。ここに至るまでには、麗澤大学出版会の西脇禮門編集長に多大なるお力添えをたまわりましたし、章友社の永原秀信代表にも大変お世話になりました。

巻末の付録1に収録したDSM-I（甚大ストレス反応）およびIII（PTSD）の2項目は、アメリカ精神医学協会（American Psychiatric Association）の許可を得て拙訳転載したのですが、その版權取得に際しては、医学書院の出版総務部・天野徳久部長および医学書籍編集部・梅澤泰子さんに大変お世話になりました。また、ミシガン州サウスフィールド、聖ヨハネ医療機構の看護師メアリ・ブリックさんには、本書にとって重要な写真（図1-1）の掲載許可をいただきました。ここに、各位に対して深甚なる謝意を表するものです。

2011年8月18日

笠原敏雄

【追記】本書第6章は、2004年に春秋社から刊行した拙著『幸福否定の構造』の第2章および第8章を全面的に改稿したものであることをお断りしておきます。他にも、それと明示してはませんが、同書からの引用が少なからずあります。